

「ジョークで時代をふっとばせ！」のブックレポート3 2002.6.28 金子尚人

3. 最重要事項解説

第4章 強さと知性を備えた牽引者 ―激震の1980年代―

1981年、アメリカ合衆国第40代大統領に就任したロナルド・レーガンとイギリスで初めての女性首相として11年の長きに渡ってそのポストにあったマーガレット・サッチャーは非常に親密な関係にあった。両者とも、徹底した保守主義者という接点があったが、それ以上に、政治家としての必要なヴィジョンや度量、決断力などを、互いに持ち合わせていたことが最大の接点だった。かつてレーガンは、サッチャーについて、「彼女はイギリスで最高の“男”である」と言ったことがある。サッチャーは希代の理論家で、「ディベートでは彼女に勝てる者はいない」とまで言われていた。

サッチャーが死んで天国に行き、神様に会った。

神が何か言おうとすると、彼女が、「ちょっとお待ちなさい」

「・・・・・・・・？」

「聖書によると、あなたは天地を6日でつくり7日目に休んだとありますが本当ですか」

「そのとおりじゃ」

「休みには何をしていたのですか？」

「ただ休んでいただけじゃ」

「あなたに休みなど必要なのですか？」

「それは・・・・・・・・」

「それに、あなたはアダムを最初につくって、その肋骨からイヴをつくったと聖書にありますが、それこそ、差別ではないですか。そうは思いませんか？」

「しかし・・・・・・・・」

「それから、もうひとつ。天地創造をする前、あなたは一体何をしていたのですか？」

神は泣き出してしまった。

著者は彼女と話していて、頭のキレ、情報の豊富さとその分析力、状況把握能力など、並みの政治家では及びつかないほどのハイ・レベルさに感心すると同時に、ある種の感銘さえおぼえたとも述べている。

第5章 まじめがジョークの男達 ―天中殺の1990年代―

レーガンの次の大統領となったビル・クリントンは50州の中でも貧しい州のひとつであるアーカンソー州の知事で知名度はそれほど無かった。しかし、予備選中に一躍全国にその名をとどろかせることになる。ジェニファー・フラワーズという女性が名乗り出てきて、クリントンとの愛人関係を暴露したのだ。しかし、ここからが彼の執念のみせどころ

だった。彼は逆にこのスキャンダルを逆手に取る手段に出た。妻のヒラリーとともにテレビに出演し、フラワーズの言ったことを否定し、真顔でウソをつきとおした。そしてヒラリーがインタビュアーの執拗な質問に終わりを告げるように、「もしこんなことを理由に、私の夫に投票しないのなら結構。そんな票は要らないわ」。彼女の、この一言で、クリントンは予備選挙を勝ち抜いたといっても過言ではない。そしてクリントンは本選挙でブッシュに勝ち、いつしか『グレート・カムバック・キッド』と呼ばれるようになった。

ワシントン・ポスト紙が、1000人の女性を対象に世論調査を行った。

質問：ビル・クリントンと寝たいと思いますか？

80%の女性が「二度と寝たくは無い」と答えた。

こういう人格の人物が、大統領として2期も務めることができた理由のなかで最大の理由は、前任者のレーガンとブッシュが土台を築いてくれた経済の空前の好況状態であった。『グレート・カムバック・キッド』は『グレート・ラッキー・キッド』でもあったのだ。

しかし、ツキと同時に、スキャンダルに対する彼の耐久能力をも認めなければならない。コンパートメンタリゼーション（細胞化）の能力を備えている人間は、「ひとつの事だけを引きずって、その問題に悩むあまり、他の重要問題についての判断力を失う」ということはない。だから、クリントンは、女性問題で議会から弾劾されそうになったときも、外交や経済政策には、ごくクールに対処できた、というのが心理学的見地である。

最後に本物のジョークとは文化の反映であると同時に、国境や民族性を超越した普遍性を必要とする。普遍性とはどんな言葉に訳しても笑いを誘うということ。そしてユーモアの理解度によってその人間の文化程度や精神的年齢が分かる。たとえば・・・、

アメリカ人、イギリス人、フランス人、そして日本人を乗せた船が沈みかけている。何人か海に飛び込まないと、全員が死んでしまう。そこで船長がまずアメリカ人に頼んだ。

「星条旗と民主主義のために飛び込んでくれ」

それなら、とアメリカ人が飛び込む。続けてイギリス人に頼む。

「女王陛下のために飛び込んでくれ」

イギリス人も飛び込む。フランス人にはこう言う。

「自由・平等・博愛のために頼む」

みんなが飛び込み、そして最後に残った日本人にはなんと叫んだか。

「さあ、」